

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00772

研究課題名(和文) 学習者の母語の事態把握が英語スピーキングに与える影響：認知言語学の観点から

研究課題名(英文) Effects of Event Construals in Learners' Native Language: From a cognitive linguistic view point

研究代表者

長 加奈子 (CHO, KANAKO)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：70369833

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は日本語を母語とする英語学習者に焦点を当て、日本語の事態把握が学習対象言語の使用に及ぼす影響について分析した。その結果、日本語を母語とする英語学習者は日本語の事態把握に基づいて英語を発話していることが明らかとなった。比較的英語の習熟度が高い層においても、出来事を完了・未完了の対立で描写しており、客観的な時間軸に基づき出来事をとらえる英語の事態把握を行っていなかった。母語の事態把握というものは母語の習得過程で身につけた出来事の見方に対するある種の認知的な癖である。学習対象言語の事態把握をより効果的に習得するために、事態把握の違いを踏まえた教材および指導法の開発が求められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで日本の学校現場において、日本語と英語の事態把握に基づく明示的な指導は行われておらず、比較的英語の習熟度が高い学習者でも、母語の対象言語の事態把握を習得することは困難である。母語の事態把握というものは、出来事の見方に対するある種の認知的癖であり、そのような「癖」を修正するためには、明示的かつ丁寧な指導が必要となることは明らかである。「自然に」習得する為には、かなりの量のインプットや対象言語の学習時間が必要となる。本研究課題の成果をもとに事態把握の違いを踏まえた教材および指導法の開発を行うことで、より効果的かつ効率的な英語学習が可能となるだろう。

研究成果の概要(英文)：This research focused on Japanese learners of English and analyzed how their event construal in Japanese influences their use of the target language, English. The results showed that Japanese learners, who construe events in terms of the perfective/imperfective opposition, spoke in English based on their construals in Japanese. Even among the group with relatively high proficiency in English, they described events in terms of the "perfective/imperfective" opposition, and did not construe events in the way of English, which is based on an objective time axis. As a result, many misuses of the tense were observed in the data by Japanese learners.

Event construal in their native language is a kind of cognitive habit acquired in the process of acquiring their native language. In order for learners to acquire construals in the target language more effectively, it is necessary to develop teaching materials and instructional methods that consider the differences in event construals.

研究分野：応用認知言語学

キーワード：英語教育 認知言語学 認知文法

1. 研究開始当初の背景

2020年度の大学入試改革において、英語の四技能が測定されることに伴い、高等学校を始め、英語教育の現場において英語の発信力の養成が重視されるようになってきている。その中で特に、学習者の発話における「文法的であるが英語らしくない英語」というものが問題として指摘されている。例えば、道に迷った際に日本語では「ここはどこですか」と尋ねるのに対し、英語では“Where am I?”と尋ねる。日本語を直訳した“Where is here?”という文は、文法的ではあるが、英語母語話者は使用しない。このような英語らしくない文に対し、学校現場では「英語ではそのような言い方はしない」と教えるのみで、「なぜそうなのか」について説明していない。しかし、これらの表現の違いは英語と日本語の出来事の捉え方（事態把握）の違いに起因するものである。英語は「モノ」と「モノ」の関係をベースに出来事を表現するのに対し、日本語は「場」を設定してから出来事を表現する。そして発話者の事態把握が、それぞれの言語の構文として表出していることが、1980年代以降の認知言語学研究における深化と拡大に伴い明らかになっている。

認知言語学は、言語には認知主体である人間が持つ認知能力が反映していると考え、生物としての人間の身体感覚に起因する能力を基盤に置き、言語の体系的な記述を行っている(Langacker, 1987, 1991 他)。この立場に立脚すれば、言語は言語使用から切り離された抽象的な原理や原則によって生成される文の集合体ではなく、言語使用者(母語話者)と認知的要因とが密接に関係して創発されたものであり、各言語に特有の出来事のとらえ方と切り離して言語を記述することはできない。つまり、言語の種類によって言語化しようとする出来事のとらえ方に対する認知的な違い(事態把握の違い)が存在し、その違いがそれぞれの言語の構文に反映されていると考える(池上, 1981, 2006 他)。この事態把握の違いという観点に立つと、先ほどの「ここはどこですか」の例や、日本語母語話者の、例えば *there* 構文の使用過多に代表されるような「文法的だが英語らしくない英語」が多用される要因の一つは、学習者の知識の欠如ではなく、学習者が日本語と英語の事態把握の違いに気づいていないからであると考えられることができる。

これまでの英語教育の現場では言語使用者および外国語学習者の認知的な側面は無視されてきた。しかし言語使用者の認知的な側面を重視する認知言語学の知見を応用することで「なぜそのように表現するのか」という学習者の認知的な側面からの説明が可能となる。そして、先の例に見られるような、「文法的であるが英語らしくない英語」に対して新しい指導法を提示できる可能性が有望視されている。

2. 研究の目的

このような認知言語学の知見に基づき、研究代表者は一連の先行研究(若手研究(B), 平成24年度～平成26年度; 基盤研究(C), 平成27年度～29年度)の成果として、新しい教授法を開発するだけでなく、その有用性を教育の現場において確認している。新しい教授法を用いた結果、日英の事態把握の違いに対する学習者の気づき(知識)が高まることが明らかになっている。しかし申請者の先行研究では、実際の言語使用の場面において、学習者がそれらの知識を活用しているかに関する定量的な検証は十分に実施できていない。特に、スピーキングのように、出来事の概念化のプロセスと発話のプロセスがほぼ同時に発生する言語活動においては、学習者の母語の事態把握の影響がより顕著に見られる可能性が高い。そこで本研究課題では、研究代表者の先行研究をさらに発展させ、日本人英語学習者のスピーキングについて分析を行い、日本語と英語の事態把握の差を埋めるための認知言語学の知見に基づく指導方法を開発するための基礎研究として、日本語を母語とする英語学習者を対象に調査・研究を行った。本研究課題は、主に以下の3つの点に焦点を当てている。

- ① 日本語を母語とする英語学習者のスピーキングにおいて、母語の事態把握がどのような影響を与えているのか。
- ② 英語学習者の英語習熟度が高くなっても母語の事態把握の影響は残るのか。
- ③ どのような指導法を用いれば、学習者が直面する日本語と英語の事態把握の差を埋めることができるのか。

3. 研究の方法

本研究課題では、学習者の発話データを収集するため、ベルギーのルーヴァンカトリック大学の Sylviane Granger 氏の主導のもと1995年から開始された Louvain International Database of Spoken English Interlanguage (LINDSEI)の方法に倣ってデータ収集を行った(Gilquin, De Cock, & Granger, 2010)。LINDSEIは、異なる言語を母語とする習熟度の高い英語学習者から発話データを収集した Spoken Corpus である。LINDSEIでは、定められたトピックに基づく対話、

自由対話、4コマ漫画の描写という3つのタスクによってデータが収集されている。本研究では、英語圏での滞在経験がない学習者を対象としたため、LINDSEIのタスクである「定められたトピックに基づく対話」を「定められたトピックに関するショートスピーチ」に変更した。調査参加者はそれまでの英語学習に関するアンケートに回答した後、身の回りの出来事に関する簡単な英語による自由対話（質疑応答）、提示された3つのトピックのうち1つを選択し、そのトピックに関するショートスピーチ、4コマ漫画の描写という順番でタスクを実施した。タスクは調査参加者への英語の負荷が比較的低いものから配置した。ショートスピーチでは、まず調査参加者にトピックが提示され、その後、選択したトピックに関する準備時間が設けられた。4コマ漫画の描写においても、以下の図で示す4コマ漫画が手渡され、英語を用いて4コマ漫画の出来事を描写するよう指示された後、1分間の準備時間が与えられた。いずれのタスクにおいても、筆記用具を使うことは認められておらず、調査参加者は自分の頭の中で発話内容を構成した。なお、調査参加者が「日本語を英語に訳す」という作業を行うことを排除するため、提示した4コマ漫画にセリフは一切入れなかった。また、調査実施者は日本語を母語とする者であるが、調査参加者にタスクを行っている最中に日本語によるインプットが発生しないよう、調査はすべて英語で行われた。なお、調査実施者による発話内容の違いを排除するため、タスク中は事前に作成したシナリオに沿って調査実施者の発話は行われた。インタビューはすべて調査参加者の許可を得た上でビデオに録画された。調査にあたっては、書面および口頭で調査内容および収集したデータの使用目的、調査途中での中止や調査終了後のデータ使用許可の取り消し等を詳細に説明した上で、同意書に署名をもらった。

録画された内容は、すべてテキストファイルに書き起こしを行った。書き起こしの際に見られた言いよどみや沈黙、繰り返し等の発話の特徴についても記号を使用して書き起こしデータ内に記述した。書き起こしたデータについて、書き起こしを行った者とは別の研究者が書き起こしルールを基にチェックを行い、その内容について確認を行った。

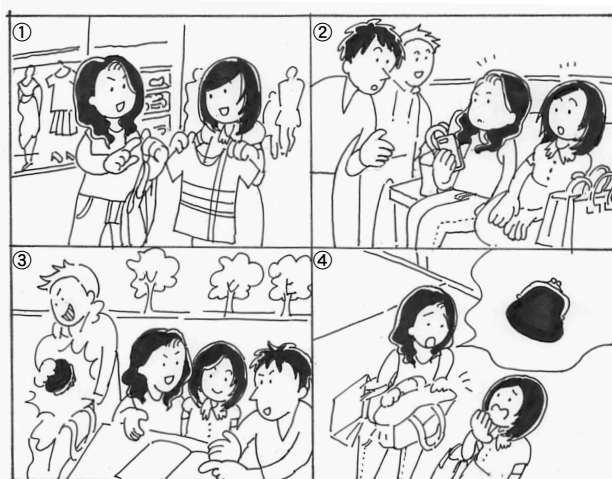


図. 参加者が描写した4コマ漫画

データ収集への参加者は四年制私立大学において英語を専門とする日本語を母語とする英語学習者10名（TOEICの平均点は685.6点：最高点810点，最低点610点）および韓国の大学で英語以外を専門とする韓国語を母語とする英語学習者6名である。参加者はいずれも英語を母語とする国に1年以上滞在した経験はなかった。当初は、日本に滞在していない日本語以外の複数の言語を母語とする英語学習者および日本に滞在していない英語母語話者へのデータ収集を比較研究データとして収集する予定であったが、COVID-19による渡航制限のため、分析するのに十分なデータ量を収集することができなかった。また、遠隔での収集のため、当初のデータとデータ収集の環境が異なるという問題も発生した。そのため、日本語を母語とする学習者から収集したデータを主に分析した。

分析にあたっては、認知言語学および英語教育の先行研究に基づき、Iモード認知の日本語とDモード認知の英語の事態把握の違いが顕著に表れており、日本語母語話者の誤用が数多く指摘されている動詞の時制に着目して分析を行った。

4. 研究成果

(1) 結果

日本語を母語とする参加者10名のうち1名は、与えられたタスクについて「4コマのうちから1コマのみ選んで英語で描写を行う」と誤解していたため、本研究課題の分析対象から外した。参加者の総発話時間は9'57.28"で、参加者1名あたり4コマ漫画を1分程度の発話で描写して

いた。本研究課題では動詞の時制について分析するため、動詞は本動詞として出現したものについてのみカウントした。また言い間違いの訂正や言いよどみとして、同じ動詞を2回繰り返した場合は、出現1回として数え、後続するものについてはカウントしなかった。また進行形や受動態については、be動詞ではなく一般動詞の出現としてカウントした。9名の調査参加者の発話に出現した動詞の総数は92であった。1人あたり平均10.22個の動詞を用いて出来事を描写していた。

次に、どのような時制が用いられているかについて分析したところ、1名を除くすべての調査参加者において、1つの発話の中に現在時制と過去時制が混在するという現象が確認された。そこで日本語母語話者の発話特徴を分析するにあたり、英語母語話者に図の4コマ漫画を提示し英語で描写してもらったところ、用いられているすべての動詞を現在時制として使用していることが分かった。出来事の前後関係を示す必要がある場合は、単純現在形と現在完了形の組み合わせで描写されているが、それ以外はすべて単純現在形である。スポーツの実況中継や料理番組の説明等で単純現在形が用いられるが、この4コマ漫画の描写もそれらと同様であると考えられる。これは英語母語話者がDモード認知を行っており、その結果、あたかもステージ上で出来事が起こっているかのごとく描写しているためであると考えられる。

日本語を母語とする英語学習者と英語母語話者の時制の使用パターンのこのような違いがどこから出てくるのか、また、具体的にどのような特徴があるのかを見るために、同じ動詞の出現頻度が高い「女性達と男性達が話す」という出来事と「女性の財布が盗まれる」という出来事について、日本語を母語とする発話者がどのように描写しているかについて詳しく分析した。その結果、有界性があり完結する出来事を過去形に、非有界性が強く感じられる出来事を現在形で表すという傾向が観察された。日本語を母語とする学習者は、出来事を「過去」や「現在」という客観的な時間軸の上で出来事をとらえているのではなく、完了しているかどうかという「完了」、「未完了」という対立でとらえており、出来事が完了しているものを過去時制で、出来事が未完了のものを現在時制で表す傾向があると考えられる。一方、英語の時制表現は「発話時を基点とした描写」である。にも関わらず、日本語を母語とする英語学習者は、日本語の事態把握を用いて出来事を認知し、その事態把握のまま、英語で出来事を表現していると考えられる。そこには、日本語と英語の時制システムが、同様のものでありパラレルな関係にあるという誤解が学習者に存在していることを強く示唆していると考えられる。

(2) 教育への示唆

教育的な側面から考えると、認知のあり方の違いを意識して教えることなしに、正しい表現は身につかないと言えるだろう。動詞の時制は、出来事の描写を支える根幹となる文法事項である。現在の指導法のままでは、英語の習熟度が比較的高くなっても、中々正しく出来事を描写できない。より効果的に学習者に習得を促すためにも、日本語と英語の事態把握の違いに即したアプローチを取る必要がある。

まず、英語の時制と日本語の時制は異なる出来事の捉え方を反映していることを学習者に明示的に教える必要がある。英語は客観的な時間軸に基づき出来事をとらえているのに対し、日本語は完了・未完了の対立で出来事をとらえている。英語の過去時制で表現される過去の出来事というものは、「完了」している出来事である。そのため、日本語では「タ形」で表現される。しかし、日本語の「タ形」で表される捉え方に、過去の出来事かどうかという捉え方は存在しない。英語の過去時制と日本語のタ形が同等である、という誤解を、学習者に生じさせないようにしなくてはならない。

英語と日本語の時制に関する認知のあり方の違いは、客観的な時間軸が存在するかどうかという形で表出していると考えられる。そのためこの「時間軸」を学習者への指導の場面でどのように導入するか、という点が次に重要な点となる。「時間軸」に基づく事態把握は、学習者の母語である日本語では行わないものである。そのため英語の時制を考える際に、学習者が常に時間軸を意識し、出来事と話者の視点をその時間軸に位置づける必要があるということを明示的に指導する必要があるだろう。特に、概念化と発話がほぼ同時に行われるスピーキングにおいては、認知のあり方の切替を明示的に指導する必要がある。例えば、最初は時間軸を実際に書かせて考えさせ、様々な練習タスクを通して時間軸の内在化を図るということも効果があると考えられる。最初は自分自身の発話のモニタリングが容易なライティングで事態認知の違いをしっかりと習得させ、その後、スピーキング課題へと以降し、英語特有の事態把握の内在化を進めるということも可能だろう。しかし、実際の教育現場でそのようなアプローチを取ることは決して容易ではない。より効果的に、かつ多くの現場で認知のあり方を教える為には、認知言語学の知識を持たなくても活用できるワークシート等の教材を整備することが必要不可欠であろう。

(3) まとめと今後の課題

本研究課題では、日本語を母語とする英語学習者に焦点を当て、日本語の事態把握が学習対象言語の使用にどのような影響を与えているかについて分析した。その結果、完了・未完了の対立

(有界性の有無)で出来事をとらえている日本語を母語とする英語学習者は、日本語の事態把握に基づいて英語を発話していることが明らかとなった。TOEIC 700点前後の比較的英語の習熟度が高い層においても、出来事を「完了・未完了」の対立で描写しており、客観的な時間軸に基づき出来事をとらえる英語の事態把握に修正がなされていなかった。英語の発話時を基点とする客観的な時間軸に基づいて英語の時制を用いるということが出来ておらず、誤用が多く観察されることが分かった。

母語の事態把握というものは、母語の習得過程で身につけた出来事の見方に対するある種の認知的な癖である。そして我々はその母語の見方で長い間、自分の身の回りの出来事をとらえ、母語を用いて描写している。そのような「癖」を修正するためには、明示的かつ丁寧な指導が必要となることは明らかである。学習対象言語の事態把握を「自然に」習得する為には、かなりの量のインプットや対象言語の学習時間が必要となる。より効果的な学習のためにも、事態把握の違いを踏まえた教材および指導法の開発が求められる。事態把握の違いを組み込んだ文法教材やタスクの開発およびその効果の検証は今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Tomei, K. and Hayashi, S.	4. 巻 29
2. 論文標題 What Repetitive Self-correction may tell us about learner acquisition	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 熊本学園大学文学・言語学論集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長 加奈子	4. 巻 53
2. 論文標題 英語学習者の母語の事態把握が与える影響：英語の時制に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 35-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤正直・久川瑠奈・竹安大	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語母語話者による英語語末子音連続の促音知覚 子音の順序と無音区間の影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本英文学会九州支部第73回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神谷祥之助・竹安大・窪園晴夫	4. 巻 22
2. 論文標題 日本語母語話者による英語の語末曖昧母音の知覚：アメリカ英語とイギリス英語の比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音韻研究	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 長 加奈子
2. 発表標題 英語の時制をどのように指導するか: 認知言語学の観点から
3. 学会等名 第12回JACET応用認知言語学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomei, J and Hayashi, S
2. 発表標題 RSC (Repetitive Self-Correction) and Linguistic Frames
3. 学会等名 第12回JACET応用認知言語学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長 加奈子
2. 発表標題 日本語を母語とする中高生の時制使用から見える母語の影響: 認知言語学の観点から
3. 学会等名 第49回九州英語教育学会長崎研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤正直・久川瑠奈・竹安大
2. 発表標題 日本語母語話者による英語語末子音連続の促音知覚 子音の順序と無音区間の影響
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久川瑠奈・佐藤正直・北川蓉華・竹安大
2. 発表標題 日本語母語話者の英語語末子音連続における促音知覚 子音の順序と調音法の影響
3. 学会等名 Prosody & Grammar Festa 5
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tomei, J. & Cho, K.
2. 発表標題 Exploring L2 construal of Japanese and Korean university students
3. 学会等名 2019 KoTESOL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川瀬義清・長加奈子
2. 発表標題 学習者の母語の事態把握が英語のグラウンディング要素に与える影響
3. 学会等名 第2回JAAL in JACET学術交流会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomei, J.
2. 発表標題 Metaphor in the writing curriculum
3. 学会等名 2019 KoTESOL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Urabe, C. & Cho, K.
2. 発表標題 Factors affecting peer assesment of students' speeches in English
3. 学会等名 2019 KoTESOL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大橋 浩、川瀬 義清、古賀 恵介、長 加奈子、村尾 治彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 312
3. 書名 認知言語学研究の広がり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	Tomei Joseph (Tomei Joseph) (50310032)	熊本学園大学・外国語学部・教授 (37402)	
研究分担者	竹安 大 (Takeyasu Hajime) (80585430)	福岡大学・人文学部・准教授 (37111)	
研究分担者	林 幸代 (Hayashi Sachiyo) (00609464)	熊本学園大学・経済学部・准教授 (37402)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------